愛着不安とDaV

恋人支配欲求の媒介効果の検討

○荒井 崇史¹・金政 祐司²

(東北大学¹・追手門学院大学²)

キーワード：デート暴力, 支配欲求, 愛着不安

Attachment Anxiety and dating violence: Examination of the mediating effect of the need for control.

Takashi Arai¹ and Yuji Kanemasa²

(Tohoku University¹, Otomon Gakuin University²)

Key Words: dating violence, need for control, attachment anxiety

問題と目的

近年, 交際関係の綻れから凄惨な事件に至る事件が度々語られる。このような未婚の交際関係にある二者間で反復的に生じる暴力をデート暴力 (Dating Violence: DaV) という。欧米ではデート暴力のリスク要因は古くから探求されてきたが, 日本での研究は限定的である。そうした中で注目されるリスク要因は, 愛着不安と支配欲求である (Davis et al., 2000; Follingstad & Bardley, 2002)。この点に注目し, 荒井・金政 (2018) では, 愛着不安と支配欲求とでどちらがデート暴力を予測するのかを検討した。本研究では, このサンプルの追跡調査で得られたデータに基づき, 時系列を踏まえた上で, 愛着不安と支配欲求とがDaVをもたらすかどうかを検討する。具体的には, 本研究では, 愛着不安が恋人支配欲求を媒介し, 間接的暴力加害をもたらすと仮定し, この媒介過程を時系列を踏まえて検討することを目的とした。

方法

手続きと調査対象者: Web調査会社の保有するモニタから現在交際相手がいる15~39歳の男女を対象にWeb調査を行った。具体的には, Time1にて男女共に各年代のサンプル数が均等になるように目標サンプル数を決定した。その上でモニタに調査依頼を送信し, 参加同意を得た上でWeb上で回答を求め, 1,800名から回答を得た。このうち, フィラー項目に適切に回答した1,551名をTime1の対象者とした。Time2は, Time1の半年後にTime1の回答者1,551名に再度調査の依頼を行う形で実施した。Time2では, 回答者750名からフィラー項目に適切に回答した667名を抽出した。このうち関係継続者が549名おり, 恋人が同一であることを確認するための恋人のイニシャルについてのマッチングを行い, イニシャルが一致していた392名をTime2の対象者とした。Time3は, Time2の半年後にTime2の回答者392名に再度調査の依頼を行う形で実施した。Time3の回答者333名から関係継続者273名を抽出し, Time2と同様に, フィラー項目に適切に反応し, 恋人のイニシャルが一致していた207名 (男性82人, 女性125人; 平均年齢31.21歳, $SD = 5.68$; 交際期間60.62ヶ月, $SD = 48.54$) を最終的な分析対象とした。

調査内容: Time1からTime3まで以下の測度を使用した。**デート暴力**: この半年間の恋人への間接的暴力加害行動 (相馬他, 2007; 6項目; 5件法)。**恋人支配欲求**: 濱口・藤原 (2016), 濱口 (2017), 柴橋 (2004) から友人など他者一般への支配欲求を表す項目を収集し, 項目内容が恋人への支配欲求となるよう文言を修正した合計10項目 (5件法)。**愛着不安**: 金政 (2006) の恋愛に関する愛着スタイル尺度の愛着不安項目 (18項目, 7件法)。**その他**: 性別, 年齢等の属性。**調査時期**: Time1が2018年3月, Time2が2018年9月, Time3が2019年3月であった。

結果と考察

本研究では, 愛着不安が恋人支配欲求を媒介し, 間接的暴

力加害をもたらすと仮定した。そこで, この媒介効果を検討するために, Time1の愛着不安を説明変数, Time2の恋人支配欲求を媒介変数, Time3の間接的暴力加害を目的変数, そして性別を調整変数とした調整媒介分析を行った。なお, 分析にはHAD (清水, 2016) を用いた。

分析の結果, 愛着不安から間接的暴力への直接効果が有意であったが, 恋人支配欲求を媒介変数として投入した場合, 愛着不安から間接的暴力への直接的な影響は見られなくなった。一方, 愛着不安が恋人支配欲求をもたらし, 恋人支配欲求が間接的暴力を促していた。この間接効果について, ブートストラップ法 (ノンパラメトリック: リサンプリング回数5000回) により95%信頼区間を求め有意性を検討したところ間接効果が有意であった (Fig1; 95%CI [0.01, 0.06])。なお, 調整変数として投入した性別は, いずれの変数への直接効果も交互作用効果も有意ではなかった。以上の結果から, 愛着不安が直接的に交際相手への間接的暴力へとつながるのではなく, 愛着不安が恋人を支配したいという欲求に結びつく場合に, 交際相手への間接的暴力が生じると考えることができる。このことは, 愛着不安が高くても, 支配欲求を抑制する方策により交際相手への間接的暴力を予防することが可能であることを意味している。

引用文献

■荒井崇史・金政祐司 (2018) 日本心理学会第82回大会。■Davis, K., E., Ace, A., & Andra, M. (2000) Violence and Victims, 15, 407-425。■Follingstad, D. & Bardley, B. (2002) Violence and Victims, 17, 35-47。■濱口佳和 (2017) 教育心理学研究, 65, 248-264。■濱口佳和・藤原健志 (2016) 教育心理学研究, 64, 59-75。■金政祐司 (2006) 社会心理学研究, 22, 139-154。■柴橋祐子 (2004) 教育心理学研究, 52, 12-23。■清水裕士 (2016). メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73。■相馬敏彦・具志堅伸隆・上田真由美 (2007) 日本社会心理学会第48回大会。

(Takashi Arai & Yuji Kanemasa)

本研究は, 科学研究費補助金 (基盤研究(B) 課題番号18H01080) の補助を受けて実施された。

** $p < .01$, * $p < .05$

Fig. 1 愛着不安が支配欲求を介して間接的暴力に及ぼす影響